報告

高等学校におけるキャリア教育授業の実践による生徒の変容

―「将来の見通し」に注目して―

酒　井　淳　平・河　井　　亨

要　旨

高大連携・高大接続を深く考えていく上で大学教育や入学者選抜のみならず高校教育のあり方を問うことが重要である。特に、生徒の人生の移行という視点からすれば、高校キャリア教育のあり方が問われねばならない。本研究では、高大連携・一貫教育を見通して、立命館宇治高等学校での１年生対象のキャリア教育授業（キャリアサービスラーニング）を対象に、高校生のキャリア意識のあり方――将来の見通し――を考察する。調査から、この授業の目標への達成度はおおむね高く、またこの授業を通して「将来の見通しがない」という生徒が減少したという結果が得られた。将来の見通しの変化した生徒を対象とする追加調査から、高校という新しい環境に入ることで選択肢が増えて将来の見通しが不確実化することがあること、CSL 実践の中で具体的に活動に参加して他者とかかわり、その中で自分と向き合うことで将来の見通しが明確になっていくこともまた明らかになった。

キーワード

高大連携・高大接続、キャリア教育、高校生のキャリア意識、キャリア教育授業の効果測定、将来の見通し

1. はじめに：高等教育研究における高校教育実践研究の位置づけと意義

今日の高等教育研究において、高大接続はきわめて重要な研究テーマの１つである。日本高等教育学会による学会誌『高等教育研究』の 2011 年 14 号や『立命館高等教育研究』2013 年 13 号でも関連する特集が編まれている。高大接続という研究テーマは、図１のように腑分けすることができる。第１に、初年次教育とリメディアル教育といった大学入学後に行われる実践がある。第２に、入学前教育や入試政策のように大学入学前に行われる実践がある。前二者は、大学が主体となって関与する実践である。これに対して、高大接続として高校が行う中核は従来型の正課の教育である。

高等教育研究・高大接続の研究テーマにおいて、主に扱われるのは、大学が関与する領域に限られている。例えば、『高等教育研究』の 2011 年 14 号特集「高大接続の現在」においては、高

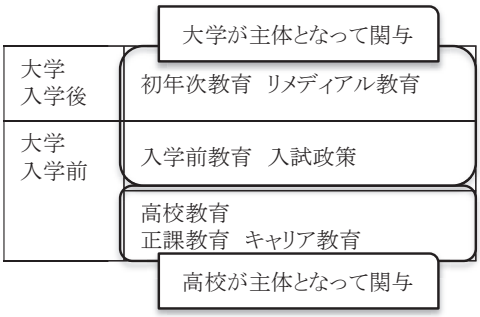

図 1　高大接続に含まれるテーマ

大接続の特徴として、非学力選抜の普及、学生の学力低下傾向、個別学力試験の変化という 3 つの側面が指摘されている（荒井 2011）。「高大接続は従来の選抜機能から教育機能が重視される時代」（荒井 2011, p.7）へと動いている。また、専門教育を担当する機関である大学側が新たに「教育接続」（山田 2011）という視点で教育を提供することが求められている。全体として、広く接続の問題が選抜をこえて後期中等教育と高等教育のそれぞれの教育課程の改革によって取り組まれる必要のあることが強調されている（吉田 2011）。また、『立命館高等教育研究』においては、特集「立命館大学の入学者選考」において、その特集名が示す通り、入学者選抜が中心テーマとなっている。

このように、研究が進められているのは入学者選抜のように大学が主体となって関与する実践であり、高校が主体となって関与する実践は十分に研究されていない。高校が不問のままでは、大学入学時点や選抜終了時点の生徒の学力や態度について、それをどう測るかといった問いは研究されても、それをどう育むかといった問いは十分に深められない。その結果、大学教育にとって大学入学時点や選抜終了時点の生徒の学力や態度は所与の変数として扱われることになり、研究の焦点も高大接続のコミュニケーション・チャンネルも入学者選抜のあり方に収斂することになる。

高大接続の研究において指摘されている教育機能や教育接続について研究するためには、高校教育それ自体についての研究を高大接続の枠組みから進めていく必要がある。高校でどのような教育が行われているのか、そこで生徒がどのように学び成長しているのかといった問いに対して研究がなされる必要がある。高校教育についての研究によって、高大接続の研究と議論の枠組みを高校生の学力や態度をどういった実践によってどう育むかといった問いにまで広げる必要がある。また、高大接続の枠組みから高校の教育実践を研究していくことで、高校として何を目指しどう生徒を育てるのかという問いとあわせて、大学教育の視点から高校の教育として何がどこまで必要になるのかという問いに取り組むことができる。高大接続の研究の進展のためにも、高校の教育実践について研究していくことが必要である。

さらに、高校から大学への移行を含んで、高大接続よりも広く人生の移行という視野から見るならば、大学教育だけではなく高校教育あるいはそれ以前にまで遡って人生の航行を考えていく必要がある（溝上・松下編 2014）。高大接続の枠組みの中でも、人生の移行を考え高校の教育実践を研究することで、高校の教育において社会への移行に向けて何がどこまで必要になるのかという問いに取り組むことができる。こうした視点からすれば、特に高校キャリア教育に着目する必要がある。

2011 年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」においても、高校キャリア教育の重要性が指摘されている。また、高校現場においてもキャリア教育が有益であるとの認識が広まっている。リクルートがキャリア教育実施校を対象に

2012 年に実施した調査によると、キャリア教育が「とても役に立っている」「ある程度役に立っている」と回答した学校が 84％であった（リクルート進学総研 2013）。

確かに、教育課程の中の位置づけ、体験的な学習の機会のデザイン、深く具体的な自己理解と将来設計の達成など、高校キャリア教育の現状には課題が多い。しかしながら、近年では、文部科学省による「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」の選定など、高校キャリア教育実践の前進を図る努力が集中的に行われている。

そこで本研究では、「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」に選定された立命館宇治高校のキャリア・サービス・ラーニング（以下、CSL と略記：立命館宇治中学校・高等学校 2014）の教育実践を対象に高校生のキャリア意識を明らかにすることを目的とする。

高校生のキャリア意識という研究テーマでは、進路意識についての研究が 1980 年代から進められている（下山 1984; 浦上 1993）。しかしながら、近年のトランジションとそれにつながる高大接続という問題のあり方からすると、キャリアの範囲を進学・就職・就社から人生の形成または移行へと広げていくことが求められている（溝上・松下編 2014; 中原・溝上編 2014）。そこで本研究では、人生の形成または移行を視野に収めて構成された「将来の見通し」項目を中心に高校生のキャリア意識を明らかにする。

また、これまでの高校生のキャリア意識調査研究においては、高校キャリア教育実践が発展途上であったこともあり、どのような実践でどのように働きかけているのかという、実践に関する要因は研究対象とされてきてはいない。本研究では、CSL という具体的な教育実践をもとに、そこでの高校生のキャリア意識のあり方から、どのように働きかけることが有効かについての示唆を探っていく。

2. 立命館宇治高校のキャリア教育授業（CSL）実践の概要

立命館宇治高校で 2013 年度より実施されているキャリア教育授業 CSL は、「総合的な学習の時間」を活用し、国際コースを除く高校 1 年生全員を対象とする 1 単位（毎週土曜日に 1 時間＝50 分）の授業科目である。この科目は、キャリア教育を実践する時間を確保するため、またキャリア教育を単発のイベント型にしないため、キャリア教育の中核となる時間を教育課程の中に位置づけることが必要だとの認識に基づく。なお、この科目は高校一年生のみの配当であり、二年生以降につないでいくことが展望されている。

CSL の目標は、「①自分の良さ・強み・好みについて気づき、進路選択に活かせる」「②自分をコントロールし、人と上手に関わるスキルを身につける」「③自ら情報をつかみ動ける高校生になる」「④働く魅力に気づき、自分の将来について考える」である。

CSL は、将来を考えるキャリアデザイン（CD）、自分や人との関わり方を知るソーシャルスキル（SS）、自分を社会に活かすサービスラーニング（SL）の 3 分野から構成されている点に最大の特徴がある。通常のキャリア教育においては、自己理解や将来設計のみに焦点を充てることが多い。このことの弊害として、キャリアを非常に狭く捉えたり、抽象的な自分探しに陥ったりして、他者との関係構築や社会との関わりに行動面でも意識面でも広がらない点がある（児美川

2013)。この難点に陥らないように、CSL の実践では、キャリアデザインだけでなく、具体的なスキルとしてソーシャルスキルを、人との関わりを含む社会との関係性を探究する学びとしてサービスラーニングを結びつけて構成されている。

具体的な授業内容は、表１の通りである。キャリアデザイン、ソーシャルスキル、サービスラーニングは入れ子になりながら配置されている。CSL のねらいを伝えることからはじまり、サー

表１　2013 年度 CSL 授業一覧表

回	月	日	分類	内容	ねらい
1	4	13*	ー	オリエンテーション、 1年間の学びについて	授業のねらい理解
2		20*	CD1	講演(ボランティアとは？)	授業へのモチベーションアップ
3		27	SL1	R-CAP、ボランティア説明	アンケートで現状把握
4	5	11*	SL2	先輩プレゼン	高校生にも出来るボランティアを知る
5		25*	SL3	事前学習	ルール・マナー、好みを知る
6	6	8	SS1	自分を知ろう！	自分のコーピングのくせを知る
7		15	SS2	認知	認知を変えてストレスを小さくできる
8		29	SS3	言葉かけ	あたたかい言葉かけ、アサーションができる
9	7	6	CD2	R-CAP結果	R-CAPの見方を知り、自分への理解深める
10	9	7	SL4	一学期の復習。 ボランティア中間発表	ボランティアの意識を高める、 活動の予定作り
11		14	SS4	ユースACTプレゼン、 謝り方・頼み方・断り方	他者と適切な関わりができるようになる。 ユースACTへの興味。
12		21	SS5	グループワーク	グループでの問題解体感、 ソーシャルスキルを使う
13	10	5	CD3	R-CAP(文理選択ワーク)	進路、特に職業や学問を考える
14		12*	CD4	JICA講演	世界に目を向けて将来を考える。
15		19*	CD5	サモア授業1	サモアに興味を持つ、世界のつながりを実感。
16	11	2*	CD6	サモア授業2	働くことについて考える。 自分なりの働く意味をつかむ。
17		9*	CD7	サモア授業3	働くことで社会問題を解決することを知る。 自分の興味や好みを知る。
18		16*	CD8	サモア授業4	夢への2つのアプローチを知り、将来を考える
19	12	7	CD9	サモア授業ふりかえり (コンセプトマップ)	コンセプトマップ作成法を知る、 サモアの学びを深める
20	1	11	CD10	キャリアアンカー	他者との交流から自分のアンカーに気づく。
21		25	SS6	ソーシャルスキルまとめ	一年の総復習、成長や今後の課題に気づく
22	2	1	CD11	キャリアデザイン1 (ブランドハプンスタンス)	ブランドハプンスタンスの理解。ブランドハプンスタンスを起こす行動をとれる。
23		8	CD12	キャリアデザイン2	自分マニフェスト作成開始。CSLの課題確認
24		15	SL5	ボランティアふりかえり	ボランティアふりかえり、成長の確認
25		22	ー	一年の学びのふりかえり (コンセプトマップ)	1年間に学んだことの整理、成長の確認
	3	17,18	ー	口頭試問	面接試験(自分マニフェスト発表)

＊:2クラス合同で実施
＜分類の「CD」は「キャリアデザイン」、「SL」は「サービスラーニング」、「SS」は「ソーシャルスキル」＞

ビスラーニングの考え方や、ソーシャルスキルを中心に学ぶ。秋の進路選択の時期は自分の将来や働く意味を考えるキャリアデザインが中心になる。その後キャリアの考え方を学び、最後は1年間の学びをまとめて授業は終了する。年度の最終（3月）に自分の将来に対しての約束をまとめる「自分マニフェスト」を作成し、その内容に関する「口頭試問（面接試験)」が実施される。

3. 方法

3.1. 調査概要

授業アンケートは、CSLの最終授業回（2014年2月）にてワークシートに添付する形で配布実施した。質問紙調査は、2013年4月と2014年1月に授業時間内に質問紙を配布して実施した。対象者は、高校一年生270人中欠席者を除く254人（4月）と226人（1月）であった。なお、2013年1月にも、高校一年生の8クラス中2クラス（66人）を対象に、同様の項目を用いた質問紙調査を試行的に行った。2013年1月の調査対象者は、CSL教育実践へ参加していないことから、参考資料として対比を行う。また、4月時点と1月時点で将来の見通しに変化の見られた生徒に対して、終業式の直前に対面配布にて追加調査を行った。

3.2. 調査項目

［授業アンケート］

授業目標の達成度；①自分の良さ・強み・好みについて気づき、進路選択に活かせる（授業全般)。②自分をコントロールし、人と上手に関わるスキルを身につける（ソーシャルスキル)。③自ら情報をつかみ動ける高校生になる（サービスラーニング)。④働く魅力に気づき、自分の将来について考える（キャリアデザイン)。上記の4項目について、「かなり達成」から「ぜんぜん達成していない」の5件法で回答を求めた。

授業に関する自由記述；授業を通じてどんな力がついたと思うか、授業の感想、来年度CSLを学ぶ後輩へのアドバイスの3点について自由記述を求めた。

［質問紙調査］

将来の見通し（溝上2009)「あなたは自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っていますか」の問いに「持っている」「持っていない」をまず選択させる。そして、見通しを持っていると回答した学生に、さらに「その見通しの中で最も重要なものを1つ思い浮かべて下さい。あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのかはわかっていますか」という問いを示し、3択（“何をすべきかわかっているし、実行もしている〔理解実行〕”“何をすべきかわかっているが、実行はできていない〔理解不実行〕”“何をすべきかはまだ分からない〔不理解〕”）から選択を求めた。

［追加調査］「将来の見通し」項目で「持っていない」から「持っている」へ変化した生徒および「持っている」から「持っていない」へ変化した生徒を対象とした。

＊前者を対象とする項目

①どういうことがきっかけで将来の見通しを持つようになりましたか？経験や授業、他の人の話などきっかけとなった出来事を教えてください。

②将来の見通しを持つにあたり、CSL が役に立ったことがあれば書いてください。

＊後者を対象とする項目

①なぜ持っていた将来の見通しがなくなったと思いますか？きっかけとなった出来事があればそれも書いてください。

②こんな出来事があれば、こんな授業があれば将来の見通しを持てるかもしれないと思うようなことがあれば書いてください。

4. 結果と考察

4.1. 授業の成果はどのようなものか

まず、授業目標の達成度を見ていく（図 2）。「①自分の良さ・強み・好みについて気づき、進路選択に活かせる」という全体に関わる目標に関しては､8 割の生徒が「まあ達成」「かなり達成」と回答している。この結果から、もっともベースとなる目標についてはおおよそ達成されたと考えられる。次に、個別のソーシャルスキル・サービスラーニング・キャリアデザインの目標については、「②自分をコントロールし、人と上手に関わるスキルを身につける」というソーシャルスキルと「④働く魅力に気づき、自分の将来について考える」というキャリアデザインに関して、8 割以上の生徒が「まあ達成」「かなり達成」と回答している。大部分の生徒がこれらの目標を達成できたと考えている。「③自ら情報をつかみ動ける高校生になる」についても、6 割以上の生徒が「まあ達成」「かなり達成」と回答している。やや割合が下がるものの、過半数の生徒が目標を達成している。他方で、「達成できていない」と回答した生徒はごく少数であった。「どちらともいえない」と回答した生徒は、2 割から 3 割であった。

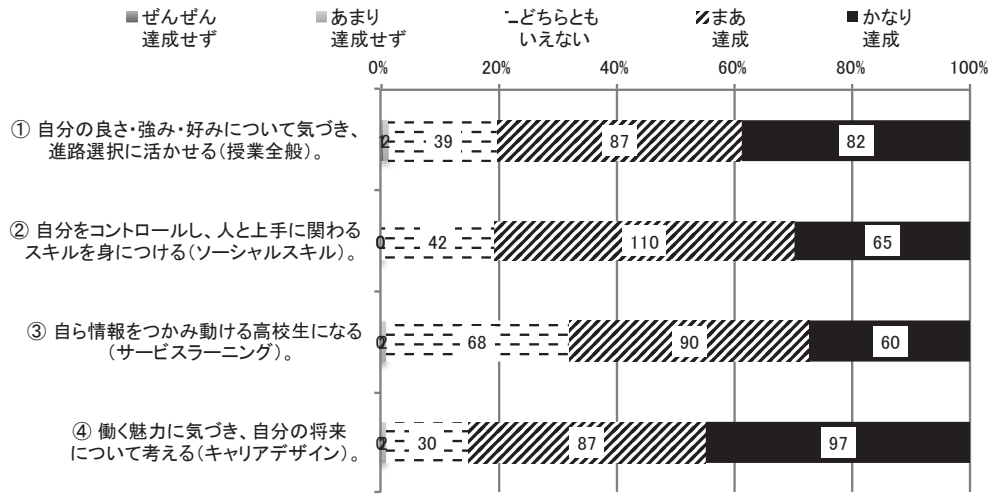

図 2　授業目標の達成度 [1)]

実践としては、目標規定文のあり方、目標の達成のあり方をより具体的かつ詳細に把握すること、目標の達成に影響を与えている要因の把握などが課題として残るものの、ひとまず多くの生徒において授業の目標が達成されていると感じられていることが確認された。

また自由記述で、身についた力と感想と後輩へのアドバイスを尋ねている（表2）。授業で身についた力としては、対人関係上の力、自己理解に関わる力、行動する力、考える力、コミュニケーション力といった汎用的な力が多く見られた。特に、自己理解については、授業の感想においても「自分や自分の将来と向き合う」ことや「自分を発見する」ことができたとの感想が広く見られた。先の授業アンケートにおける目標の達成を部分的に裏づける結果となった。また、授業の感想や後輩へのアドバイスとしては、この授業が他の科目と違って独自の価値を持っている点を強調すると言うことが広く見受けられた。人と関わり、将来を考え、自分と向き合っていくことの大切さが生徒たち自身にとって認識されていると思われる。

表2　自由記述の結果のまとめ

授業で身についた力	授業の感想	後輩へのアドバイス
①人と関わる力（25%）	①自分、自分の将来と向きあえた（33%）	①この授業を大切にしてほしい（30%）
②自分を見つめる力（24%）	②自分を発見した（26%）	②この授業をまじめにうけてほしい（30%）
③将来について考える力（22%）	③他の教科では学べない（10%）	③この授業は生きる上で役に立つ（30%）
④ストレス対応（17%）		
⑤自ら何か行動する力（17%）		
⑥考える力（15%）		
⑦コミュニケーション力（12%）		

＊複数記述が可能であるため合計が100%とならない。生徒の自由記述の内容に基づいて、類似している内容をカテゴリにまとめた。

4.2. 将来の見通しはどうなっているか

以上の検討は、高校生のキャリア意識について、CSL実践が一定の効果を持ったことを示している。他方で、高校生のキャリア意識のあり方については、まだ全般的なこと—CSL実践を通じて、自己理解が進み、将来を考える機会が得られるということ—しか判明していない。キャリア意識に関しては、大学生および卒業後のトランジションにおいて、将来の見通しを作っていくことの意義と重要性が強調されている（溝上2009,2011; 溝上ほか2012）。具体的には、将来の見通しを持っている学生が学業パフォーマンスも高いこと、学生の将来の見通しは4年間を通じてそれほど変化しないこと、大学時代の将来の見通しが卒業後の仕事のパフォーマンスに一定の影響を与えることなどが明らかにされている。大学生のキャリア意識の研究成果を視野に収めるのであれば、高校・大学・人生と貫くトランジションにおいて、将来の見通しを作っていくことの意義はどれほど強調されても強調され過ぎではないだろう。そこで、本研究においても、CSL実践の中で高校生の将来の見通しのあり方を検討することとした。なお、先行研究で、「将来の見通し」と一語に集約されているのは、先に方法の項で示した調査項目によって把握されている。「将来の見通し」の調査項目は、「1. 将来の見通し無し（見通し無し）」「2. 将来の見通しはあるが、それに向けて何をしたら良いか分からない（不理解）」「3. 将来の見通しがあり、すべきことを理解しているが実行はしていない（理解不実行）」「4. 将来の見通しがあり、すべきことを理解して実行している（理解実行）」の4つのタイプに回答者を分けることができる項目である。

ここで、実践をほぼ一通りくぐった１月時点と実践を未経験の前年度の１月時点での結果の比較、実践前の４月時点と実践をほぼ一通りくぐった１月時点との比較、４月から１月へのタイプの変化の順で検討を進めていく。表３が「将来の見通し」の調査結果である。

表３　将来の見通しの結果

	2013 年 1 月 CSL 経験無し	2013 年 4 月 CSL 経験前	2014 年 1 月 CSL 経験後
理解実行	14　(21.2%)	59　(23.2%)	50　(22.1%)
理解不実行	19　(28.8%)	64　(25.2%)	56　(24.8%)
不理解	11　(16.7%)	66　(26.0%)	71　(31.4%)
見通し無し	22　(33.3%)	65　(25.6%)	49　(21.7%)

第１に、2013 年１月の結果と 2014 年１月の結果を比較することで、CSL 経験の有無の影響を検討する。理解実行タイプと理解不実行タイプの割合はそれほど大きな違いが見られなかったが、CSL 経験のある年度の生徒において見通し無しタイプが少なかった。そして、おそらくその影響もあって、不理解タイプが多かった。厳密には、年度ごとの生徒集団の特性はじめ様々な要因が考えられるが、CSL 経験によって、将来の見通しを持っていないという生徒の割合が一定程度低くなっているものと考えられる。なお見通し無しタイプが少なくなったとはいえ、２割程度存在しており、今後の実践の課題として残されていると言える。また、今回の結果からは、CSL 実践の結果、理解実行タイプの大幅な増加は見出せなかった。この点も実践の課題であると同時に、今後は生徒の「将来の見通し」についてより正確に把握していくことも必要になる。

第２に、2013 年４月の結果と 2014 年１月の結果を比較することで、同一年度の生徒集団が CSL 経験を経て「将来の見通し」をどのように変化させたかを検討する。はじめに、表３より、全体的な割合の変化について確認する。理解実行タイプと理解不実行タイプの割合に変化はほぼ見られないものの、見通し無しタイプの割合が 25.6％から 21.7％へと減少し、おそらくその影響から不理解タイプが 26.0％から 31.4％へと増えている。この結果からも、CSL 実践を経験することで、将来の見通し無しタイプが減少するということが効果として窺える。他方で、先と同様に、理解実行群の増加につながらない点については実践上および調査法上の工夫を要する。

続けて、2013 年４月時点の将来の見通しタイプが 2014 年１月時点でどうなったのかについて個々の生徒のタイプの変化に分け入って検討する。表４より、理解実行タイプ（51.1％）、理解不実行タイプ（31.6％）、不理解タイプ（50.9％）、見通し無しタイプ（48.1％）のいずれにおいても４月時点から１月時点にかけて変化していない割合が高い。大学生活のみならず、高校生活においても、CSL 実践のようなキャリア教育実践およびサービスラーニング実践を通じてもなお、生徒の将来への見通しは変化しにくいものであることが窺える。

表 4　2013 年 4 月時点と 2014 年 1 月時点での将来の見通しのタイプの変化

		2014 年 1 月時点									
		理解実行		理解不実行		不理解		見通し無し		全体	
2013 年 4 月時点	理解実行	24	(51.1%)	12	(25.5%)	7	(14.9%)	4	(8.5%)	47	(100.0%)
	理解不実行	13	(22.8%)	18	(31.6%)	19	(33.3%)	7	(12.3%)	57	(100.0%)
	不理解	6	(11.3%)	13	(24.5%)	27	(50.9%)	7	(13.2%)	53	(100.0%)
	見通し無し	3	(5.6%)	7	(13.0%)	18	(33.3%)	26	(48.1%)	54	(100.0%)
	全体	46	(21.8%)	50	(23.7%)	71	(33.6%)	44	(20.9%)	211	(100.0%)

しかしながら、教育現場においては、生徒が将来への見通しが持てるようになることおよび将来への見通しが持てない状態から脱することに向けて働きかけていかねばならない。

この二面に着目するならば、将来の見通しタイプの変化に目を向ける必要がある。具体的には、4 月時点では理解不実行タイプ・不理解タイプ・見通し無しタイプであったにもかかわらず、1 月時点では理解実行タイプとなっていた生徒が 22 人（全体の 10.4%）いる。理解実行タイプへの移行は、理解不実行タイプ・不理解タイプ・見通し無しタイプとなるにつれ、割合が低くなるものの（13 人［22.8%］、6 人［11.3%］、3 人［5.6%］）、働きかけによって変化しうる結果は実践にとって勇気づけられる結果である。他方、4 月時点で理解実行タイプ・理解不実行タイプ・不理解タイプであったとしても、見通し無しへと変化してしまう生徒もいる（それぞれ、4 人［8.5%］、7 人［12.3%］、7 人［13.2%］）。

本調査研究では特に、将来の見通しがあるのかないのかという区分に着目して追加調査を行った。具体的には、4 月時点で将来の見通しがなかった生徒が将来の見通しがある状態（理解実行タイプ［3 人］・理解不実行タイプ［7 人］・不理解タイプ［18 人］）へ変化した生徒と、将来の見通しがあった（理解実行タイプ［4 人］・理解不実行タイプ［7 人］・不理解タイプ［7 人］）生徒が将来への見通しがない状態へ変化した生徒を対象とした。回答者は、前者対象 28 人中 18 人、後者で対象 18 人中 13 人であった。

まず、将来の見通しを持てるようになったきっかけに関する記述のまとめから見ていく（表 5；次頁）。

表 5　将来の見通しを持つことができるようになったきっかけ

分類	生徒の記述
A 授業(CSL)と関係すること (10人)	
ボランティア活動(3人)	①CSLでのボランティア ②子どもと出会ってから(ボランティア活動で) ③鳳凰杯のボランティアで人を裏からサポートしたいと思った
R-CAPを活用した授業(3人)	①自分にあった職業を調べる授業(R-CAP) ②自分にあった職業のやつ(R-CAP)が役に立った！ ③R-CAP
CSLの授業内容全体や大学の説明(3人)	①仕事の適性でいろんな職業を知った ②CSL授業と大学の説明など ③大学に話を聞くのが多かったり、将来のことにふれるのが多くて、考えるようになったから、そのうちこういうふうになりたいなあっていうのが見えてきた
授業で好きなことを考えたとき(1人)	①授業で自分が何を好きかを考えたとき、一番初めに出てきたのがネット音楽だった。そのネット音楽で使われてる映像がすごくで、その映像を自分でも作りたいと思うようになって学部を選べた。
B 自分で決めるという経験(3人)	
文理選択をしたこと(2人)	①進路選択をする際に、私は何を学んで何をしたいかをしっかり考えたときに、こういうことがしたいと思えるようになった。 ②文理選択を決定したこと
行きたい学部が決まったこと(1人)	①行きたい学部が決まった
C 学校生活全般(4人)	①まわりの人が考えているから自分も考えないとと思った ②2学期の成績が思ってたよりよかった ③立宇治に来て入った部活 ④高校生活を送る中で自分には何の力があるのか、何をしたいのかが見つかった
D 偶然の出来事(1人)	①整骨院で治療を受けて寮に帰ったとき心身ともに軽くなっているのを感じ、こういう仕事につきたいと思った。 また疲れて寮に帰ったとき、真っ先にパソコンでお笑いを見ている自分に気づき、「自分が本当にすきなのはお笑いかも」と思い、芸人になりたいと思った。

将来の見通しを持てるようになったきっかけは、文理選択や部活のような日常活動から偶然の出来事まで様々である。特に、文理選択のような通過儀礼として全生徒が経験する出来事では、「まわりの人が考えているから自分も考えないと」と思うようである。そうした通過儀礼に直面する際に、「こういうことがしたい」と思えるように、進路に関する意思決定・自己決定のための準備をしていくことが重要であり、高校キャリア教育の役割もこの点に認められる。

そして実際に、将来の見通しを持てるようになったきっかけとして多くの生徒が挙げたのがCSL の経験である。具体的には、R-CAP というアセスメントツールを挙げる生徒がいた。R-CAP は生徒たちが将来の手がかりを得て、目標とするキャリアデザインを考えられるようにまとめられたキャリア教育実践ツールで、質問紙調査で人のパーソナリティーのうち、価値観、志向、興味、関心の部分を測定するものである。自分と向き合う経験が、生徒のキャリア意識形成に貢献している。さらに、単に自分と向き合う経験だけでなく、「ボランティアで子どもと出会った」「ボランティアで人を裏からサポートしたいと思った」とあるように、他者と関わる経験も重要である。

続けて、より特定的に CSL 授業の中で役立ったことを聞いた結果を見ていく（表 6；次頁)。

表６　将来の見通しをもつことができるのに CSL 授業で役立ったこと

分類	生徒の記述
A 授業(CSL)の学習内容(9人)	
R-CAP(7人)	①R-CAPが役に立った ②自分にあった職業を調べる授業(R－CAP) ③R-CAP ④R-CAP？自分にあった職業を探すこと ⑤自分にあった職業のやつ(R-CAP)が役に立った！ ⑥R-CAPでは、それですべてをきめたわけではないけれど、こういうことも向いている(満足できる)ということが参考になった。 ⑦R-CAPとかでいろいろな職業を知って、視野が広がった
ボランティア活動(2人)	①ボランティアポイントを集めさせられた。でも楽しかった。 ②ボランティアとか自分にむいている仕事を考えさせられた。
B 自分と向きあう時間の確保(5人)	①CSLで好きなことを考えた。将来について考えられた。 ②将来のことがわかるようになった ③(授業で)ワークシートを記入するときに、自分をふりかえる機会が多くあり、自分の現状を把握する手助けになった ④将来について考えないといけないと思わされた ⑤自分の将来の人間像を考える授業はよかった
C 出会い、印象に残る教材(3人)	①きっかけとして、人生を築く川端さん型か、夢をはじめからもっているイチロー型か ②様々な道で働いている人や活動している人を知って視野が広がった ③レジの女性や駐車場のおじさん(授業の教材)
D 回答なし(1人)	

ここでも R-CAP を挙げた生徒が多かった。「R-CAP では、それですべてを決めたわけではないけれど、こういうことも向いている（満足できる）ということが参考になった」とあるように、適性検査（本校では R-CAP を活用）を実施するだけでなく、自分と向きあう機会として位置づけることが重要である。さらに、「(CSL 授業で）ワークシートを記入するときに、自分をふりかえる機会が多くあり、自分の現状を把握する手助けになった」とあるように、適性検査のみならず、ワークシートのようなツールにおいても、自分と向き合う機会を設けることができる[2)]。自分と向き合う機会は、多層的に生徒に提供されることが重要であると考えられる。さらには、自分だけに閉じて自分と向き合うのではなく、「ボランティア体験で自分に向いている仕事を考えさせられた」とあるように、実際の体験とそこでの他者との関わりの中で自分自身と自分の将来を考えることが重要であると考える。

次に、将来の見通しを持てなくなった理由に関する記述のまとめを見ていく（表７；次頁）。将来の見通しを持てなくなった理由として多いのは、視野が広がることで選択肢が増える、持っていた見通しが不安になるという互いに関連していると考えられる２点である。「高校に入りいろいろなことを知り、選択の視野が広がった」のように、新しい環境で視野が広がるという状態は、肯定的な状態である。他方、新しい環境は、漠然とした不安や自信の喪失にもつながりうる。視野を広げることと選択を具体的に絞り込んでいくこととのバランスが重要になってくる。また、先に指摘した通り、自分と向き合うことが自分だけに閉じてしまうと、「将来のことを考えれば考えるほどわからなく」なることがある。また、実際の具体的な行動や他者との関わりが伴わずに、他の生徒と比較してしまうとその不安は増大する一方になってしまう恐れがある。この点からも、実際の具体的な行動や他者との関わりの中で、自分と向き合うことが重要である。

表７　将来の見通しをもてなくなった理由

分類	生徒の記述
A　視野の広がり、スタンダードの高まり（6人）	
視野が広がってやりたいことが増えた（5人）	①いろいろな視野が広がって、まだまだしたいことが増えたから ②なくなったというより、この1年でそれ以外にもいろいろな道はあるんだなって思って、固定の夢にとらわれないようになった感じ ③高校に入りいろいろなことを知り、選択の視野が広がった ④高校入学当初は好きな鉄道にこだわっていて、将来は車掌になると固定していたけれど、ボランティアなどをして人と関われる仕事なら何でもいいと範囲が広くなったから ⑤いろんな種類のやりたいことが見えてきた
スタンダードの高まり(1人)	やらなくてはいけないことを具体的にしようとして、4月と1月で意識が変わってハードルが上がったから。
B　不安、自信をなくす（5人）	①中学校からあったものが最近薄れてきた。 ②将来のことを考えれば考えるほどわからなくなった。 ③将来の目標や夢は持っているが、それに向けて何をやればよいのかということがまだ完全にわからず、不安になったから ④持っていた見通しに自信がなくなり、まわりの人たちと比べると考え直すべきかなと思った。 ⑤まわりの人が具体的にしっかりと夢を持っていて、自分が本当に何をやりたいのかわからなくなったから。
C モラトリアム（1人）	①今の人生が楽しいから将来のことを考えるよりも今を精いっぱい生きたい
D その他（1人）	①4月にも見通しはなかったと思う

最後に、将来の見通しを持つ可能性がどこにあるかを生徒自身の記述から見ていく（表８）。

表８　将来の見通しをもてる可能性

分類	生徒の記述
A　仕事を知る機会（3人）	
職業紹介	①職業紹介など ②職業別にどんな手順を踏めばその職業につけるかということをもう少し詳し教えてほしい。
仕事体験	①仕事体験ができたら将来なりたいものの範囲を狭めることができて、その範囲を深められると思う。
B　個別相談（3人）	
似たような先輩との話	①もっと自分と同じような経験をした先輩と話をしてみたい。 ②自分と同じような進路を選んでいたり、性格などが同じような人がどんな進路に進み、どんな職業でどんなことをしてるのかが知れたら、（見通しを）もてるかもしれない。
個別相談	①個人的に進路相談とか、もっと学部のことを聞きたい
C　その他（6人）	
特になし、今のままでいい(4人)	①別に今でも持とうと思ったら持てるのかなと思いました。 ②自分は（選択の視野が）増えすぎたので、（CSLは）このままでいいと思いま ③自分の中の問題なので（授業は今のままでいい）。ボランティアについての概念が狭いのかもしれない。 ④（CSLは）今のままで大丈夫
課外での体験授業（1人）	①課外での体験授業
何かを見つける（1人）	①自分が熱中できるものを見つける
D 記述なし（1人）	

生徒たちは「仕事を知る機会」や「個別相談」があれば将来への見通しを持てると考えている。特に、仕事やキャリアについて具体的に知ることの重要性を生徒たち自身が認識している点は注目に値する。仕事やキャリアについて、例えば大学に進学した先輩や大学卒業後働いている先輩の話など一貫校が持っている強みを活かしたプログラム—現在も進めてはいるが、より効果的なあり方の模索を含めて—の開発は今後取り組むべき有望な方途であると考えられる。

5. まとめと今後の課題

最後に本調査研究のまとめを行い、今後の課題を明確にする。本研究では、高大接続・一貫教育を見通して立命館宇治宇治高校キャリアサービスラーニングの教育実践を対象に、高校生のキャリア意識を探ってきた。実践の内容を紹介し、実践を検討するために行った授業アンケート・質問紙調査・追加調査の結果を見てきた。

第1に、生徒の目標達成の度合いや「将来の見通し」に関して見通し無しタイプが減少しているなど、CSL教育実践の効果が一定程度確認された。「他の教科では学べない」や「この授業は生きる上で役に立つ」といった自由記述に見られる生徒の声からもCSL教育実践の効果が見られる。高校においてキャリア教育実践をイベント型で終わらせるのではなく、本CSL実践に見られる要素を正課・正課外に取り入れていくことが重要であると考えられる。また本実践の文脈は、トランジションの視点で捉えることが可能である。生徒・学生は、高校教育・大学教育・仕事へ移行していく中で学び成長していく。生徒・学生の人生全体を見通すならば、大学教育より前の入学者選抜、そしてそれよりもさらに前の高校教育から、キャリア教育を考えていくことが重要である。

しかし第2に、CSL実践後も、目標の達成を実感していない生徒や将来の見通しがない生徒がいるという事実は正視しなくてはならない。実践面で今後必要になることは、生徒実態をより正確に把握するために調査およびアセスメント上の工夫をすることである。例えば、将来の見通しの中身について具体的かつ多面的に把握し、場合によってはルーブリックのような段階評定可能なアセスメントを用いることが考えられる。また実践上の内容や介入の方法を工夫することも必要である。例えば、将来の見通しをもてるようになった生徒の事例を蓄積し、その下の学年の生徒に対して具体的な個別対応を図ることなどが考えられる。

他にも、大学生においてキャリア意識と学業パフォーマンスとの関連が検討されているように（溝上 2011）、高校生のキャリア意識と学業パフォーマンスとの関連を検討すること、具体的にはCSL教育実践での学びと成長が他の授業での学びと成長へとどのように「架橋」（河井 2014）していくかを明らかにする点も課題として挙げられる。これを明らかにする際には、紙と鉛筆式の質問紙調査だけに依るのではなく、インタビュー調査を組み合わせることで、混合研究法として生徒のキャリア意識とその変容の質的な多様性に迫ることが可能になると考えられる（川那部ほか 2013）。また、本研究は、実践研究として取り組まれた。どのような実践であったのかについても言及することで実践研究の要件を追求したものの、どのように働きかけることが効果的であるのかを明らかにするための要因の統制は十分にできなかった。今後は、準実験デザイン（南風原 2001）に基づくアクションリサーチが進められねばならないと考える。

そして、本研究はまた、高大接続の枠組みから取り組まれた。本研究が示した点は、課題は多いものの、高等学校でもキャリア教育において高校生の将来展望を明確化することが可能であるということである。しかし、そこでの将来展望として捉えられていたことが、高大接続とトランジションを十分見通したものとはなっていなかった。この点は教育実践の側の課題として受け止め、今後、実践の目標の再設定を行う必要があると考える。取り組みの枠組みが大きいのに対して、対象となった実践は小さく、明らかになった成果は今はまだ決して大きいとは言えない。しかしながら、本研究は、具体的な生徒の学びの経験と成果という「学びの実態」（川那部・河井 2014）に踏み込んだ研究の端緒と考える。今後は、高校でどのような教育が行われ、そこで生徒がどのように学び成長しているのかという大きな問いのもと高校生の学びの実態を調査していく必要がある。その際、学習の到達度だけでなく学習過程についての問いも探求する必要がある。具体的には、高校でどのような経験をするのか、どのように学習に取り組むのか、どのような知識・技能・態度の点で成長を感じているのかといった問いである。これらの問いは、立命館大学で取り組まれているインスティチューショナル・リサーチにおける問いの一部であり（川那部・河井 2014）、この問いの共有―そして、生徒・卒業生・学生の学びと成長の実態の共有―を進めていくことが今後の高大接続の課題である。

第 3 に、見通しの変化を追う中で、高校キャリア教育である CSL 教育実践の中で自分と向き合うこと、それも具体的な行動や他者とのかかわりの中で自分と向き合うことの意義が確認された。キャリア教育の焦点は、学部選択や職業、就労に留まらない。

> 社会的な存在である人は、人生の履歴において、さまざまな「役割」を引き受けながら生きていく。それは役割を引き受けるという仕方で社会に参加し、貢献していくことでもある。そしてそうした「役割」を担うことができるように成長すること、そのことが自分の「生き方」として、自分の中に統合していけることが「キャリア発達」である。その「キャリア発達」のための力量形成に資するのが、「キャリア教育」なのである。（児美川 2013, p53）

まさにここで述べられている社会という視点の意義が本実践の中からも再確認されたと言える。大学に生徒を送り出す側の高校教員の立場として、生徒たちには大学のいろいろなことに挑戦できる環境を最大限活かせるようになってほしいと切に願う。そのためには生徒が「将来の見通しを持っている」ことは重要である。そしてその鍵はキャリア教育であろう。よりよいキャリア教育の実践を模索し、生徒たちが大学、社会で輝いて生きていける基盤を作りたい。

謝辞

本論文の基となる CSL 授業については、教育課程作成、授業実施など多くの教職員の協力と支援による。また CSL 推進委員会のみなさま、2013 年度高校 1 年生担任の先生方、CSL 共同担当の田内雅人教諭には特に多くの協力と助言をいただいた。また、英文校閲に際して Redmond Kieran 氏に助力いただいた。ここに感謝するものである。

注

1） 授業全般の項目で「あまり達成していない」が2名、「全然達成していない」が1名、サービスラーニングの項目で「あまり達成していない」が2名、キャリアデザインの項目で「あまり達成していない」が2名であった。なお、方法の際に触れたように、授業アンケートでは、生徒のIDを把握できていない。生徒のIDを把握することで、授業アンケートと質問紙調査を結びつけることができ、目標の達成度ごとに将来の見通しに変化があったか等の分析が可能となる。今後の課題となる。

2） ワークシートおよびそれを用いた授業については、『Career Guidance』（2014）Vol.402（pp.13-25）にて公表されている。

参考文献

荒井克弘「高大接続の日本的構造」『高等教育研究』第14集、2011年、7-21頁.

南風原朝和「準実験と単一事例実験」南風原朝和、下山晴彦、市川伸一編『心理学研究法入門―調査・実験から実践まで』東京大学出版会、2001年、123-152頁.

河井亨『大学生の学習ダイナミクス―授業内外のラーニング・ブリッジング』東信堂、2014年

川那部隆司、笠原健一、鳥居朋子「教学IRにおける学生調査の手法開発：量的アプローチと質的アプローチを併用した学業成績変化過程の検討」『立命館高等教育研究』13号、2013年、61-74頁.

川那部隆司、河井亨「学びの実態調査の枠組み～入り口から出口までの学生の学びの可視化を目指して～」ITL NEWS No.32

児美川孝一郎「キャリア教育のウソ」ちくばプリマー新書、2013年

溝上慎一「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討―正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す―.」『京都大学高等教育研究』15巻、2009年、107-118頁.

溝上慎一「高校での将来への見通しが大学での力強い成長を促す」『学研・進学情報』、2011年6月号、2-5頁

溝上慎一、松下佳代編「高校・大学から仕事へのトランジション」ナカニシヤ出版、2014年

溝上慎一、中原淳、舘野泰一、木村充「仕事のパフォーマンスと能力業績に及ぼす学習・生活の影響―学校から仕事へのトランジション研究に向けて―」『大学教育学会誌、』34巻2号、2012年、139-148頁文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」、2011年

中原淳、溝上慎一編「活躍する組織人の探求　大学から企業へのトランジション」東京大学出版会、2014年

リクルート進学総研「2012年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」『リクルートキャリアガイダンス』No45、2013年、6～31頁.

リクルート「『教科学習の意味』を発見する特別授業」『Career Guidance』Vol.402、2014年、13-25頁.

立命館大学高等教育研究開発推進機構「特集立命館大学の入学者選抜」『立命館高等教育研究』2013年、1-60頁.

立命館宇治中学校・高等学校「CSL（キャリア・サービス・ラーニング）実施報告書～高校1年生を対象とした正課でのキャリア教育授業～」（文部科学省「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」報告書）、2014年。

下山晴彦「ある高校の進路決定過程の縦断的研究」『教育心理学研究』第32巻3号、1984年、206-211頁.

浦上昌則進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連、教育心理学研究、41巻3号、1993年、358-364頁.

山田礼子「大学からみた高校との接続」『高等教育研究』第14集、2011年、23-46頁.

吉田文「大学と高校の接続の動向と課題」『高等教育研究』第14集、2011年、169-181頁.

Change of the Students' Career Awareness through a Practice of Career Education in the High School:

Focusing on "Future Perspective"

SAKAI Junpei（Teacher, Ritsumeikan Uji Junior & Senior High School）
KAWAI Toru（Lecturer, Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University）

Abstract

The critical issue of articulation between high school and college in Japan is not only higher education and examination but also high school education itself. The purpose of this article is to investigate high school students' career development. Recent studies showed students' future perspective had important role in student development.

We investigate high school students at Ritsumeikan Uji high school from the perspective of articulation, focusing students' future perspective. This high school developed career service learning educational program. This program was selected as an observational study of the practice of career education and so it is suitable field of survey. 254（April）and 226（January）students participated our questionnaire. The results showed that almost all students achieved educational goal in this program and decrease the rate of students did not have future perspective.

We conclude that the opportunities of self-exploration with the participation in service activities interacting various others are effective for high schoolstudents' career development. The critical issue regarding progression from high schools to university in Japan is not only higher education and examination but also high school education itself.

Keywords

Articulation between High School and College, Career Education, Future Perspective, Effect of Career Education,